

エジンバラ大学 派遣

瀬尾 光里（6年）

【Highland Wildlife Park】

エジンバラに着いた翌日、ハイランドに移動し、動物園動物のアニマルウェルフェアについて学んだ。まず車で各動物の生態やアニマルウェルフェアの説明を受けながら動物園を回った。私の想像していた動物園とはほど遠く、それぞれの動物の敷地が公園かと思間違うほど広い。特にホッキョクグマやトラのエリアを見に行き驚いた。雑木林や広大な草地、池が広がり、まるで本物の自然のようである。雑木林の中に隠れ、広々と草原を走り、動物がなるべく自然と同じような行動ができるようにたぐさんの配慮がなされていた。その後、ニホンザルとツルを見て福祉評価を行った。事前講義として北海道大学の先輩である大谷さんに、動物福祉を考える上では「栄養」「環境」「健康」「行動」「精神」の5つの領域を良い状態にすることが重要であると習った。評価基準はこの5つの項目に基づき作成されており、動物の健康状態や行動、動物舎の構造に至るまで隔々を観察して点数を付けた。私が普段動物園に行く時は、動物を何となく見るだけでここまで細かく見たことがなかった。評価ポイントをおさえてよく観察すると、普段は見過ごしているであろう、動物が風をよけて小屋に入る姿や、池の水を飲む姿、動物の習性に適したエンリッチメント、怪我をかばう行動などが目に付いた。このように少し見方を変えるだけで、「このエンリッチメントはみんなが遊んでいて良いな」「もっと小屋を増やしたらいいのに」「この怪我は採食に支障が出ないのだろうか」と考えることがたくさん出てきた。次に私達は動物園の中を回り、ユキヒョウの前に辿り着いた。岩場を懸命に登る子供や、それを上から穏やかに眺める夫婦はとても和ましかったが、この時にパークの方から言われた言葉にはっとした。「家族全員見られるなんて、僕達はとてもラッキーだ

ね。」なぜラッキーなのかというと、ユキヒョウのエリアもまた広大であり、険しい岩場が作られていて、岩場の頂上やその奥にユキヒョウがいるときは人間の観察スポットからは見ることができない。そのため家族全員が人間から見える場所に姿を現すことは稀なのだ。日本の動物園では、常に動物は人の目に付く場所にいて（隠れる場所がほぼなくて、または敷地が小さくて）、動物を見ることができるとが当たり前である。なぜなら動物園は動物を見ることが目的であるという考え方が普通だからだ。しかし、パークの獣医さんは続けた。「動物が野生で暮らしていたら、人はその動物をなかなか見ることができないよね。だから動物が見ることができないのが普通であることをもってほしい。このことを知れば、見ることができた時一層嬉しいよね。」動物園がどのようにあるべきか、概念を大きく変えられた気がした。

【エジンバラ大学見学】

Highlandからエジンバラ市街へ戻り、エジンバラ大学を2日にかけて見学した。

1日目は馬の臨床を見学した。午前は前肢に感染が広がって来院した馬の処置で、エコー検査やレントゲン検査が行われた。触診やディスカッションには私達も参加させてもらった。エジンバラ大学では最終学年の5年生が全ての科をローテーションで回るシステムだった。内科と外科だけでなく、馬の科やエキゾチック科、麻酔科、皮膚科など幅広い科があり、全てを履修するのに1年かかることに驚いた。午後は歯の定期検診に参加した。馬の歯専門の獣医さんがおり、専用の器具で噛み合わせが悪くなった馬の歯を削っていた。夕方には先生の授業があり、馬のローテーションにあたってはいる学生と共に授業に参加した。授業の形式はとても能動的なもので、先生が問いかけたことに対して生徒があれや



エキゾチック科の診療の様子

これやとどンドン意見を言っていた。学生は20人ほどいたが、40分程度の授業の中で全員が発言していたように見えた。間違えることを恐れずに積極的に発言し、理解を深めていく学生の姿勢を私も見習いたいと思った。

2日目はエキゾチック科と麻酔科を見学した。エキゾチック科ではフェレットやカメ、インコ、ウサギなど様々な動物が来院した。フェレットは採血を行うところを初めて見たが、猫よりも小さくて難しそうだった。病態からフェレットのヘマトクリット値を学生や先生の皆で予想して、採血後に答え合わ



エジンバラ市街

せをしていた。インコでは、足と羽の状態を見るために、部屋を閉め切って飛び回らせて観察した。エキゾチックアニマルの診療は北海道大学では中々出会えないので貴重な体験だった。麻酔科では靱帯の手術のモニタリングを見学した。研修医の先生と学生がマンツーマンで麻酔管理をしており、ディスカッションをしながら進んでいた。ランチタイムでは、学食で1人でうろうろしていると、昨日一緒に授業を受けた現地の学生3人が声を掛けてくれて一緒に食べるようになった。お互い最終学年だったので、進路についてや獣医師免許試験について語り合うことができた。皆とてもフレンドリーで、おすすめのレストランやバブも教えてくれた。

【終わりに】

本プログラムを通し、動物福祉や野生動物、エジンバラ大学の獣医学教育、英語でのコミュニケーションなど、数多くの貴重な経験を得ることができた。旅にトラブルはつきもので不測の事態もあったが、ここに書ききれないほどかけがえのない思い出もたくさんできた。最終学年に在籍する今、これからの進路を考える上でも非常に助けになった。最後に、Neil先生を始めとした現地の先生方、身の回りのサポートをしてくれたエジンバラ大学の学生さん、引率して下さった先生方と大谷さん、IVEP担当の及川さん、仲良くしてくれた同行者の後輩達、プログラムに携わった全ての方々にこの場を借りて御礼申し上げます。皆様のサポートがあってこそ、このプログラムを充実したものにすることができました。本当にありがとうございました。



エジンバラバーカーを着て

エジンバラ大学 派遣

鹿又 峻（5年）

IVEPIにおけるエジンバラへの派遣について報告する。派遣への参加を希望したきっかけは一言ではまとめられないがプログラムの存在を知ったときからエジンバラへの派遣に興味があったことと動物福祉についてより深く学びたいと思ったことが大きい。語学力などの不安はあったが5年生にとっては最初で最後の機会になるため思い切って応募を決めた。また今回の派遣は私にとって初めての海外経験であり、勉学以外にも海外生活を経験することに対する楽しみを胸にエジンバラへと降り立った。

今年度のプログラムの内容としてはハイランド地方でのカヌーをはじめとしたアクティビティとHighland Wildlife Parkの見学、エジンバラ大学の見学、ロスリン研究所の方からの野生動物保全のご講義に大きく分けられる。どのプログラムも非常に興味深く、多くのことを感じ学ぶことができた。

まずエジンバラ到着翌日から3日間滞在したハイ

ランド地方であるが、そこは動物たちが放牧されている風景や森林が広がる自然豊かな土地だ。到着後の国立公園内を散策やスベ川の下りでその自然を身近に感じることもできた。鹿などの野生動物との遭遇はなく残念であったがビジターセンターでスコットランドの動植物について知り、興味がわいた。3日目に訪れた Highland Wildlife Park では園内の見学と展示施設の動物福祉評価を行った。動物たちは自然の環境に近い広大な土地の中で生活しており、その配置も車でなければまわれないような最低限の囲いがなされている場所で自由に動き回ることができたり、肉食であるユキヒョウの施設の近くに草食のマーコールの施設があることで動物たちが野生環境下の様に互いの存在を知覚できるなどの工夫がなされていた。動物福祉評価では二ホンザルとクロツルの評価を行った。評価は動物福祉の5つの領域に基づいた項目が設定されており点数化をする

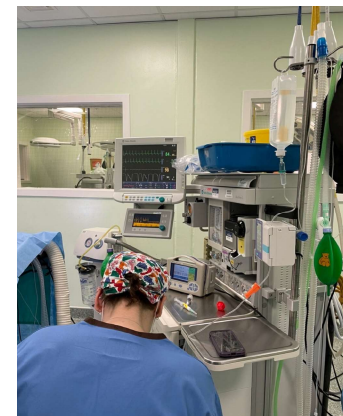


動物福祉評価の様子

形式である。今までは動物園動物における動物福祉とは健康に問題がなく見えることや十分な広さのある施設で飼育されていることなどが満たされていれば理想的であると考えていたが、評価項目と向き合うことで動物が行動を選択できることや適切に欲求を満たしていることが重要であるとわかり、動物の野生下での生活環境や生態をよく理解して施設を作ることが真に動物福祉に配慮していることにつながると感じた。また評価はそのときに見た姿でしか行えないため一見欲求を満たせていないと感じた設備や動物の状態について疑問に感じた点があったが、評価後のディスカッションでそれぞれの理由について丁寧に教えていただき、継続した多角的な評価が必須であると思った。

次にエジンバラ大学の見学であるが、私は1日目に馬の臨床施設、2日目に小動物病院の麻酔科の見学をさせていただいた。馬の臨床施設では屈腱炎の経過観察と狼歯の治療、実習後の講義に参加した。講義といっても先生の話を聞くだけではなく先生からの問いかけに学生が答えていく形式のもので、沈黙の時間がほとんどなく自分の考えを学生たちが次々と述べていく様子は見習わなくてはならないと思った。小動物病院ではTPLOの手術とCT撮影、交通事故に遭った猫の処置に立ち会った。ちょうど北海道大学でのポリクリを終えたタイミングであったため北海道大学動物医療センターとの細かな違いに注目しながら見学をさせていただいた。どちらの見学でも確認や質問をしながら学生が主体となって処置を行う場面が多々あり、それ支える教員の数も多いように感じた。講義で解答したり自らの手で処置を行なうために学生たちは今まで習ったことをしっかりと身につけており、加えて教員によるサポート体制が整っていることでそのような形態の実習を行なうことができているのだと思った。

最後に野生動物保全についての講義であるが、遺伝学の観点からの保全という内容で非常に興味深く聴かせていただいた。再導入や交雑に関する話題は遺伝と野生動物保全という話題から想像がついたが、象牙などの違法な流通の調査に遺伝子の観点か



手術で使用されていた麻酔機器

ら携わっているというお話が新鮮で面白かった。難しかった内容や単語もあったが丁寧に対応してくださったことで理解を深めることができた。

プログラムとして参加した内容に加えて個人的には今回の派遣は動物福祉について深く考えるきっかけを与えてくれたと思う。今までの獣医学生生活の中でも動物福祉学を学び、そのほかの科目でも動物福祉に関する話題について講義を受けてきたが実際に評価に取り組んだことで講義だけではわからなかった観点や姿勢に気づいた。この先の学生生活の中で動物実験や臨床の実習を行なう際は動物福祉の観点にも意識を向けてみたいと思う。イギリスの状況を少しではあるが目にして知ることができたことや評価を一度行ってみたいことで満足せずこれからも学び続けていきたい。獣医師として社会に出た際に多くの人に動物福祉について正しく理解してもらい、日本における動物福祉をよりよい状況へと変えていけるように努力を続けていこうと思う。

最後に、引率してくださった先生方、派遣前から様々なところで支えてくださった事務の皆様、温かく迎え入れ多くのことを学ばせてくださったエジンバラ大学の先生方をはじめとした現地の皆様への感謝の言葉を述べたい。本当にありがとうございました。

エジンバラ大学 派遣

栢田 ののか（5年）

2022年度エジンバラ派遣において、私はエジンバラ大学やハイランド地方で様々な実習を経験した。その中で最も印象に残っているのはエジンバラ大学動物病院の見学であるため、本レポートではエジンバラ大学動物病院で過ごした2日間について記載したい。

エジンバラ大学では The Dick Vet Equine Hospital と The Hospital for Small Animals をそれぞれ1日ずつ見学した。

The Dick Vet Equine Hospital

エジンバラを来訪時、私はまだ馬の臨床実習をしていなかったが、座学で学んだ知識を活かすことができた。馬のローテーション中のエジンバラ大学の学生と共に、検査や治療を見学した。

・施設見学

初めに病院内の説明をもらった。馬の病院は馬房、歩様を見るためのスペース、治療スペースとその間の導線が1つの建物の中で完結していることが特徴的であった。馬の種類としては私が訪れた日はサラブレッドが重種馬が入院していて、ポニーはいなかった。手術室は見学室と大きな窓でつながっており、さらに手元を写すカメラのモニターが見学室にあった。それによって多くの学生が一度に手術を見学することができるようになっている。

・馬の前肢エコー

午前中は感染性の深指屈腱炎治療後の馬のギブスを外し、エコーで浅指屈腱、深指屈腱、深指屈腱支持靱帯、繋靱帯、中手骨の位置関係を確認しながら炎症の程度を確認した。

・馬の歯科治療

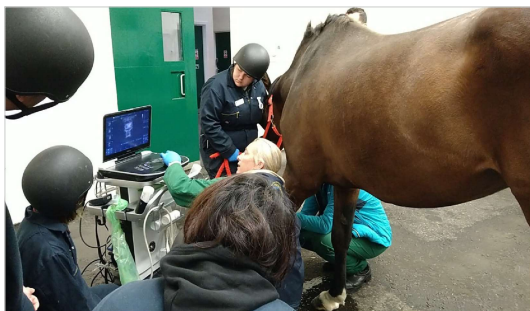
午後は馬の歯科治療を見学した。馬の歯科治療室には馬の頭骨標本と図が置いてあり、それを用いてまず馬の正常な歯列や歯の数を確認することができた。口腔内を洗浄した後に、一人ずつ馬の口に入れて歯の状態を確認した。その後内視鏡を口の中に入れて、どの歯が異常であるかを確認した。異常な歯が3本あったため、エジンバラの学生3人が1人1本ずつグラインダーを用いて治療した。

The Hospital for Small Animals

エジンバラ大学の The Hospital for Small Animals には様々な科があり基本的には科ごとに入院室が分かれており、診療予約も分かれているようであった。以下には見学したエキゾチックアニマル科について記載する。

・エキゾチックアニマル科について

エキゾチックアニマル科の入院室は、様々な動物種に対応できるようにいくつかのタイプに分かれていた。野生動物用、小動物用、鳥用（ヒーター付き）、両生類・爬虫類用（ヒーターと赤外線ライト付き）、酸素室などがあった。北海道大学にはそもそも



教員が学生に説明しながらエコーを当てている様子

もエキゾチックアニマルの入院施設がないのでこれは大きな違いである。

・血糖値検査（フェレット）

治療室でフェレットの血糖値検査を見学した。フェレットの採血部位として、サフエナ、頸静脈、前大静脈を試みていたが血液が採れず、最終的に肉球を傷つけて血液を採取していた。血糖値を一人一人予想して付箋に書き出してから検査をしていたのが興味深かった。ただ検査をするだけでなく、動物の状態から値の予測を立ててみることで、直接採血や検査に手を出さない学生も参加することができると感じた。

・検査前のディスカッションとX線撮影（カメラ）

元気がなく手足が甲羅に入らなくなってしまったカメラが来院した。教員の指示ですぐに検査を進めるのではなく、まずは学生を集めて、原因として何が考えられるか、何を目的として何の検査をするかについてディスカッションした。北海道大学と比較すると全体的に診療の時間に余裕があるように思え、だからこそ学生への指導に時間をかけられているように感じた。このカメラはメスであったため、卵詰まりが考えられ、X線を撮ることになった。X線の撮影後に再度学生を集め、何が疑われるかを話し合った。今回のカメラでは小さく真っ白なものが写ったため、石や結石が詰まっていることが考えられた。X線検査の料金は£200、麻酔をかけて撮影する場合さらに£100であった。これは2022年10月現在の日本円で5万円を超える価格であり、日本と比較して高額であった。



カメラについてのディスカッション

・学生による問診（ウロコインコ）

外来の問診にも参加した。エジンバラ大学では、学生と研修医が同時に診察室に入り、まずはローテーション中の学生が問診をとり、もう一人の学生がそれを電子カルテに打ち込む。その後研修医が学生の問診で不足していたことを問診する形式であった。検査や治療方針の説明は研修医が行っていた。ふらつきで来院したウロコインコの問診をとった後、身体検査が必要であったため一度預かることになった。預かる際に、研修医がオーナーに対して学生がインコを扱っても構わないか確認を取っていて、オーナーが獣医学教育に協力的であったことが印象に残っている。

・身体検査（ウロコインコ）

ウロコインコの身体検査では、まず脚に外傷が無いかを確認し、歩かせてみて歩様を確認した。検査の途中でインコが飛んでしまい、先生がジャンプしてつかんで捕まえていた。日本で鳥の診察を見学した際には、鳥が飛んでしまった時には部屋の電気を消してから鳥が地面に降りてくるのを待って捕まえていたためジャンプでつかむのは衝撃的であった。

今回の派遣では、私が最も興味を持っていたエジンバラ大学でのエキゾチックアニマル診療を見学することができ、大変勉強になった。エキゾチックアニマル診療の中身については、半日の見学の中では日本と大きく異なることは無いと感じた。しかし、大学病院としての設備や教育体制としてはエジンバラ大学の環境が素晴らしいと感じた。特に診療時間や教員数に余裕があり、教員や研修医が学生の教育に時間を割けているという印象が強かった。今回学んだことや感じたことを活かして、日本のエキゾチックアニマル診療やその教育に貢献できるような獣医師を目指したい。

最後に、引率の先生方をはじめとして、変則的なスケジュールの中でエジンバラ派遣を支えてくださった皆様に感謝したい。本当にありがとうございました。

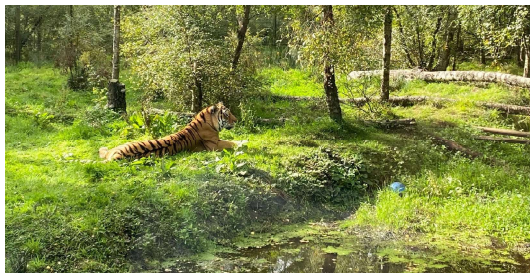
エジンバラ大学 派遣

水田 一輝（5年）

私は将来海外の専門獣医師として働くことに興味があり、世界でも有名なエジンバラ大学の獣医学部を見学することが出来るということ、そして最近自分が興味を持っている動物福祉に関して学ぶ機会があるということで今回のプログラムに応募しました。現地では前半にハイランドにて Highland Wildlife Park を見学し、その後

エジンバラではエジンバラ大学の小動物動物病院と馬専門の病院を見学しました。私の報告書では特に印象に残ったこの2つの研修内容について記載したいと思います。

Highland Wildlife Park はチャリティー団体によって経営されている動物園で、高い標高を活かしてホッキョクグマやユキヒョウなどの寒冷な気候を好む大型動物を多く飼育しています。私がこれまで見てきた動物園と異なり、1匹あたりの飼育面積が非常に広く、なるべく自然本来の生息環境に近い飼育環境となっていました。例えば2匹の子供と両親と一緒に生活しているユキヒョウの飼育場所には切



Highland wildlife park の様子

り立った崖が用意されており、高山地帯に生息するユキヒョウが実際どのようにバランスを取り崖を上り降りしているのかを見せる工夫がされています。ホッキョクグマには広大な草原と丘が与えられており、観光客は敷地に隣接したコースを車で周ったり高台からシロクマの様子を眺めたりすることが出来ます。このような起伏や自然に富んだ広い敷地で飼育することで動物園動物の福祉は改善され、実際にこの動物園で常同行動（動物の退屈を示唆する）を発症したケースはないとのことでした。Highland Wildlife Park では動物の飼育の他に教育や Wild Cat の繁殖保全にも力を入れています。ス

コットランドに存在する Wild Cat という種を保全するために動物園内で繁殖し野生に放すという取り組みをしていると聞き、動物園がそこまで強く野生動物保全に介入していると知らなかったのが驚きました。私たちを案内してくれた飼育員さんは普段から小学生相手にも動物の生態や動物園の在り方について教えるツアーをしており、彼の「動物を“探す”動物園」という新しい考え方に私も影響を受けました。



広大な敷地で飼育されているホッキョクグマ

また午後には二ホンザルとツルの飼育場と動物の様子を観察し、動物福祉の観点からその飼育環境が優れているのか評価を行いました。評価項目は大きく環境、食事、健康状態、行動に分けられ、それぞれがさらに細かく分かれ全32項目を5段階評価で判断しました。私は二ホンザルの飼育スペースに木がほとんどないことに気づき、日本の生息環境に近づけるためにもっと木を多く植えた方が二ホンザルの本来の習性を発揮できると考えました。しかし実際はかつて生えていた林があったのですが、サルによって破壊されやむなく伐採してしまったとのことでした。これは森を移動しながら生息する野生のサルの群れとは異なり同じ環境に留まり続ける動物園ならではの課題だと考え、動物園が野生環境を再現することの限界を感じました。

エジンバラ大学では小動物病院と馬の病院をそれぞれ1日ずつかけて見学しました。小動物病院ではCTやMRIの機器を有している点は北海道大学と同様ですが、診療科の豊富さと従業員の規模に驚きました。北海道大学では主に外科と内科のみに分かれています。エジンバラ大学では腫瘍科や心臓科、エキゾチックアニマル科などいくつもの科が専門に独立しており、それぞれに診察室や獣医師が割り当てられていました。それぞれの科に十分な数の獣医師と看護師がいることで、より専門性の高い獣医療を提供できると感じました。これらすべての科を最学年である5年生は4週間ずつローテーションしていると聞き、臨床実習の期間の長さにも驚きました。また私が最も日本の大学との違いを感じた点は、学生に対する教育システムです。北海道大学のポリクリでは保定や採血以外ほとんどが見学になってしまう一方で、エジンバラ大学の5年生は1人で基本的な診療の流れを行っていました。例えば内科では生徒は1人でまず問診を行い、その後研修医にその内容を伝え、何が足りないかを考えてから改めてレジデントと2人で問診をとるという生徒が卒業後自立して臨床の現場に出られるような工夫がされていました。またレジデントも難しい症例はさらに上の獣医師に指導を受け、学生・レジデント・

教員の体系的な教育システムが完成していました。私が最も感銘を受けたのは現地の教育に対する姿勢です。問診後や検査・治療方針を立てる前、画像読影の際などレジデントは常に生徒に対し質問を投げかけ、臨床現場で必要とされる知識や思考能力を培うよう促していました。生徒もそれに対し間違いを恐れず考えて回答し、臨床医によるちょっとした講義の時間なども通して卒業後即戦力となるために必要な力を伸ばしていました。同じ5年生でありながらも、臨床を目指すものとして自分との圧倒的な差を感じました。

馬の病院では小動物と同様に5年生が臨床実習に取り組んでおり、こちらの実習でも先生から生徒への質問の投げかけが活発でした。病院の施設自体も大きく、手術室や処置室、ICUなどが完備され小動物病院と同じような環境を用意していることに驚きました。当日は飼い主さんとバットの馬を実習に使用し、超音波検査や治療の現場に参加しました。胃石を溶かすためにコーラを馬に飲ませるなど、なかなか刺激的で北海道大学では経験できない貴重な馬の臨床に参加することが出来ました。



馬の診療を行っている様子

今回の派遣を通じて動物福祉に関してや野生動物に関して、エジンバラ大学獣医学部のプログラムなどについて学習し体験することが出来ました。いずれも日本の大学や施設では決して経験できないような内容であり、刺激的で非常に有意義な内容であったと思います。今回で広がった自分の視野を基に、国際的な視点を持って日本の獣医療を見つめ続けていきたいと思っています。

エジンバラ大学 派遣

阿部 栞里（3年）

今年度の派遣では例年と異なり、動物福祉に関するワークアウトが行われたり、ロスリンの研究者による保全遺伝学の講義が行われたりした。どの活動もととても面白く、自分の知識のなさに気付かされるものだった。

それらの活動の中で印象に残ったことは Highland Wildlife Park での動物福祉のアセスメントと環境保護について学んだこと、エジンバラ大学の動物病院を見学したことだ。それらについて述べたいと思う。



日本猿のアセスメントを行う様子

Highland Wildlife Park はエジンバラ動物園と連携し、寒冷地に生息している動物を広大な敷地で飼育している動物園だ。その広さのおかげでそれぞれの動物に十分なスペースを確保することができおり、伸び伸びと活動する動物たちを観察できた。また、モウコノウマとヨーロップバイソンという体格が異なる動物が同じ敷地で飼われていたりすることが印象的だった。

ここでは動物たちの展示の他に環境保護として、絶滅が危惧されている動物の繁殖も行っていた。その中でもヤマネコの繁殖に力を入れており、今年は22匹のヤマネコが誕生したそうだ。スコットランドではヤマネコと家猫が交わってしまっており、純粋なヤマネコの数が増えていることが問題になっている。だから誕生した子たちは餌をとる方法を覚えさせるなど自然環境に適応させたのち、家猫があまりいないスコットランドの森林に放すとのことだった。

動物福祉のアセスメントの活動では日本猿とヨーロップバスの様子を動物福祉に基づいて点数をつけた。動物福祉とは動物の身体的精神的状況のことであり、環境、食事、健康、態度、精神の5つの領域に基づいて考えるものである。日本ではこの5つの

領域という考え方があまり導入されていなかったことで新鮮な考え方だった。今回の動物園では福祉の考え方が浸透していたため、動物たちが十分に活動できる場所があり、人間から隠れる場所が提供され、おもちゃが入れてあったことで、福祉としての点数が高かった。

他の動物たちにも福祉の考え方が使われており、ユキヒョウの展示場には、彼らが宿舎にいる間にマーコールという草食動物が時々入れられているそうだ。このことにより、お互いの匂いが刺激になりエンリッチメントの一種としてはたらくのだという。他にも近隣の住民から伐採した木の枝を寄付してもらうことで、木の枝を主食とする動物たちにさまざまな種類の枝を与えることができ、動物たちも飽きないそうだ。

こうした動物福祉の考え方は日本の動物園ではあまり見たことがなかったが、生き生きとしている動物たちを見るうちに、日本にも浸透させなければいけない考え方だと思った。また職員さんたちの意識も福祉をベースとした考え方だった。今の動物たちのいる環境はいいものだとは言えるが、最善のものだとは言えない。だから常に改善していく必要があ

るとおっしゃっていたことが印象的だった。このように動物たちについて真摯考え、行動できる飼育員がいるからこそ Highland Wildlife Park はいい動物園だと思ったのだと考える。

エジンバラ大学での動物病院ではウマの病院と小動物病院の麻酔科を見学させていただいた。

ウマの動物病院で印象的だったことは家畜の動物病院とは異なる施設として存在していたということだ。ウマはペットとして扱われるため、家畜の動物病院では診察しないということのようだ。この点は日本人と感覚が異なり興味深かった。また、治療した部分を刺激しないためにハーネスで補助されて立っていたウマがいたが、動けない彼のためにウマの模型を見えるところに友達の代わりとして置き、音楽をかけてリラックスさせてあげているところが面白かった。

小動物臨床では麻酔科に行ったため、外科手術やCTを取るところなどを見学させていただいた。

これらの動物病院を見学させていただいて感じたことは生徒たちの積極さだ。ウマの動物病院にいた生徒は疑問があればすぐに先生に対して質問していた。麻酔科にいた生徒は、自分でどのようにして麻酔をかけるかを判断して患畜に行っていた。これは生徒一人に対しての先生の人数が多かったからかもしれない。ウマの病院では先生一人に対して生徒が3人しかおらず、麻酔科では一対一で教えていた。おそらく先生側に余裕があるからこそ、生徒たちが積極的に臨床に参加できているのだろう。

また、患者さんは生徒が自分のペットに治療を施すことに対して嫌には思わないのだろうかと聞いたところ、嫌だと思ふ気持ちはあるだろうが、大学病院は教育を行う場だと飼主さんも理解しているから生徒にさまざまなことを体験させていると答えていただいた。このようにドライに日本人は考えることが少ないように思う。これが日本人特有の愛護という感情によるイギリスとの違いだと思った。

そのほかにもさまざまなことを、どちらの動物病院でも体験させていただいた。



CTを撮る様子

今回の研修では日本とは異なる考え方を多方面から学ぶことができた。また、私の報告書では詳しく述べることはできなかったが、保全遺伝学という学問があることも初めて知った。内容も興味深く、自分でも掘り下げてみたいと思う内容だった。加えて、海外で大人の助けを借りずに生活することは初めてだったので、自身の成長も感じられた。これらの学びは今後の学習に役立てられるものばかりだった。反対に得られたものもあったが、英語力や知見の狭さ、疑問を持つことなど、自分の未熟さも突きつけられた研修だった。

最後に、引率をしてくださった先生方、講義をしてくださった現地の先生方、現地の学生たち、そして事務の皆様、今回のプログラムを支えていただいた皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

エジンバラ大学 派遣

岸本 馨佳（3年）

エジンバラ派遣について、研修内容や実際に感じたことを中心に報告する。

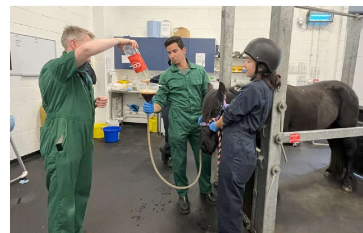
エジンバラに到着した翌日、Aviemoreという自然豊かな郊外へ向かった。スベイ川ではカヌー体験（先生のカヌーが転覆！）をし、その次の日はHighland Wildlife Parkを訪れた。ここは車で回るゾーンと徒歩で回るゾーンに分かれている広大な動物飼育施設で、日本の動物園とは全く違う印象を受けた。European bison や鹿などの草食動物はどこまで続いているのかも分からないほどの広大な草原で飼育されていた。特に印象に残ったのは、動物が刺激を感じ、退屈しないようにする工夫が多くなされていることである。例えば、草食動物にはベレットでの給餌も可能だが、それでは刺激にならないため、餌として木を齧ることで退屈しないようにしているようだった。また、snow leopard の飼育場所と Markhor（ウシ科ヤギ属の草食動物）の飼育場所は隣に設置されており、互いの匂いを感じることで刺激につながるという話だった。

午後には、日本猿とEuropean craneについて、ワークシートに沿って動物福祉の評価を行った。動

物福祉の重要な観点として5つの領域があり、「栄養、環境、健康、行動」がいかに「精神状態」に影響を与えるかが指標となる。この5つの領域がさらに細分化された項目にそれぞれ5段階で点数を付ける。例えば、Utilisedという項目なら、「飼育環境中のすべてのエリアと設備が利用可能かつ使用されているか」について評価する。この活動を通して、「猿の飼育場所に木が全くないのは良いのか」や「鶴の飼育場所の茂みは効果的に使われているのか」など、普段は気にしていなかった詳細なことについても意識を向けることができた。また、いかに「栄養、環境、健康、行動」が動物の精神状態に影響を与えるかを考えるきっかけになった。さらに、Highland Wildlife Park では飼育員や獣医の他に教育だけを専門に担うチームがあるらしく、日本との違いに驚いた。このような取り組みによって一般の人々の動物飼育に対する意識を向上させることにつながると感じた。

エジンバラに戻り、2日間でエジンバラ大学獣医学部の小動物臨床と馬の臨床を見学した。小動物臨床では5年生（最終学年）の学生について内科を見学した。まず、先生と学生4名ほどで、とある症状（今回は多尿）を訴える患畜が来た際にどのように対応していくのかについてのディスカッションが1時間ほどあった。その後、患畜が来てから診断をするまでの流れを見学した。5年生の学生が、1人で飼い主から症状などについて話を聞き、先生と足りなかったところを話し、次に先生が飼い主から話を聞き治療方針を決定するという流れがあり、学部生がここまで診断に関われることに驚いた。

馬の臨床では、馬専用の病院や馬だけに集中したローテーションなど北海道大学に



コーラを使った馬の治療

はない教育環境を体験することができた。午前中は5年生チームと共に臨床を見学した。ICUや手術室など馬専用の充実した設備があった。ここで、初めて聴診器を貸してもらい、馬の心音を聞いた。脇の下で心音を聞くことなどは座学では習っていたが、3年生の私にとって実際に心音を聞くのは初めてでとても良い経験になった。やり方を教えてくれた5年生の学生に、測った心拍数を伝えると、それは早いと思うか遅いと思うか、またその馬の症状を考えるとどうかなどを質問された。質問の答えは難しく出すことができなかったが、5年生の学生の理解度の深さに驚かされた。また、5年生の学生は外頸静脈への鎮静剤の注射なども手際よく行っており、練習量の多さや意識の高さを実感した。馬の臨床で面白かったのは、食べ過ぎによって胃内で草が固まってしまい消化できなくなった馬への治療である。先生が馬の胃内までチューブを通し、そこに市販のコーラを流し込んだ時は非常に驚いた。コーラの酸性が胃の内容物を溶解させるらしい。実際にコーラは薬としてストックしていると聞いて、このような斬新な治療法があることを知ることができた。

午後は、馬の臨床のターンの学生たちによる症例報告のプレゼンを聞いた。馬の症状や、治療法、今後の展望や問題点について発表しており、臨床を見学したり参加したりするだけでなく、考えをまとめて先生とディスカッションする時間がしっか

り設けられているのが理解度を高める上で素晴らしいと感じた。

休日に訪れたスコットランド国立博物館は非常に面白かった。多種多様な動物の標本やクローン羊で有名なドリーの剥製、さらに世界中の文化まで、多くの展示とゲーム感覚で学べる体験コーナーなど1日では回りきれないほどの充実度だった。しかも入場料無料で感動した。また、北海道大学にきたエジンバラ大学の学生とは、オススメのレストランで一緒にディナーを食べたり、まだマシな日本料理の店を教えてくださいとたくさん交流することができて楽しかった。

今回のエジンバラ派遣を通して、アニマルウェルフェアの考え方や、高度な臨床教育について学ぶことができた。また、英語での交流を通して、英語学習への意欲が増した。反省点としては、獣医の専門用語についての英単語をもっとたくさん覚えていれば、得られるものがより多かっただろうということだ。授業資料の英単語など、読み飛ばしてしまうことも多いと思うが、聞いてわかる程度にしておくとうかなり役立つと思う。

最後に、現地でたくさんのことを教えてくださった先生方や学生の皆様、引率の先生方、エジンバラ派遣を支えてくださったすべての皆様に感謝申し上げます。また、コロナ禍でのイレギュラーな事態に迅速に対応してくださった皆様のおかげで無事にとても充実した実習を終えることができました。本当にありがとうございました。



スベイ川沿いで